

海外研修における英語指導者志望生の変容的学習

小嶋 英夫*

Transformative Learning for EFL Teacher Trainees in Overseas Training

Hideo KOJIMA

要旨 経済協力開発機構(OECD)は、DeSeCoプロジェクト(2002)で定義したキー・コンピタンスに立脚して、Education 2030プロジェクト(2018)でさらに三つのコンピタンスのカテゴリーを「変革を起こす力のコンピタンス」として特定した。日本において、このような動向を理解できる明日の英語指導者を養成することが期待される。本研究は、2019年度春休み中に実施された第2回ウォリック大学応用言語学センター(CAL)短期研修を学びのコンテキストとして、プログラム開発者・引率者の立場から、参加学生計19名の専門的・人間的成長を促す変容的学習に焦点を当て、質的・量的データに基づき分析・考察することを目的とする。新型コロナウイルスの影響下でプログラムを終えた本研修では、授業・ホームステイ・寮生活・学校訪問・文化訪問・学生間交流などに関する参加者の自己内省から、これまで抱いていた価値観・世界観を変容させる傾向が認められた。海外研修を取り入れた教員養成教育について、今後とも変容的学習理論の視点から継続的に探究する必要がある。

キーワード: ウォリック大学CAL短期研修 Education 2030 英語指導者志望生 変容的学習

1. はじめに

OECDは、「教育とスキルの未来2030」プロジェクトを進める中で、2030年という近未来において子どもたちに求められるコンピタンスを検討するとともに、コンピタンスの育成につながるカリキュラムや教授法、学習評価などについて考えるとしている。各国が次の二つの問い「現代の生徒が成長し世界を切り拓いていくためには、どのような知識・スキル・態度・価値が必要か」、「学校や授業の仕組みが、これらの知識・スキル・態度・価値を効果的に育成していくことができるようにするためにどうすべきか」について、答えを見い出すように支援することが狙いとされる。このプロジェクトは、パートナーシップを通じて

人々・利益・地球・平和の持続可能性を確保することによって、国連の2030年持続可能な開発目標(SDGs)にも貢献するものである。

ここで、これからの英語教育は、英語の知識・スキルのみならず21世紀型のコンピタンスの向上につながるべきであると考えられる立場から、OECDの説く幅広い教育目標の必要性について確認したい。21世紀に入り、個人と集団のウェルビーイングの観点が注目されてきている。ウェルビーイングは、「所得・財産・職業・給料・住宅などの物質的な資源へのアクセス以上のものを含む概念であり、健康・社会参画・社会的関係・教育・安全・生活満足度・環境などのQuality of Lifeにも関わる」(文部科学省 2018)とされる。今後は、自分のみならず友人・家族・コミュニティ・地球全体のウェルビーイングを考えなければ

* こじま ひでお 文教大学教育学部学校教育課程英語専修

ばならない。英語教育を通じて、学習者は自らの人生を形作り、他者に貢献していくためのエイジェンシー・目的意識・コンピタンシーを身につけることが問われる。

OECDがDeSeCoプロジェクト(2002)で定義したキー・コンピタンシーは、「相互作用的に道具を用いる」、「異質な集団で交流する」、「自律的に活動する」の三つであるが、Education 2030プロジェクト(2018)では、社会を変革し未来を作り上げていくためのコンピタンシーを、「新たな価値を創造する力」、「対立やジレンマを克服する力」、「責任ある行動をとる力」として特定した。この度英語指導者志望生を対象とするウォーリック大学CAL短期研修の引率者として、3週間に亘って研修参加者を支援したが、彼らが英国の地で上記のコンピタンシーに類する能力を育む姿を観察できたと感じる。

本研究は、Jack Mezirow, Robert Boyd, Paulo Freireなどが唱えた変容的学習を理論的枠組みとして、海外研修参加学生の21世紀型コンピタンシーの育成につながる変容の兆候を、質的・量的データに基づき分析・考察することを狙いとする。

2. 変容的学習理論

変容的学習(Transformativ Learning)は、学習者がすでに身につけていた価値判断や行動の枠組みを再評価するプロセスを述べる際に用いられる教育理論の用語である。Jack Mezirow(1997)によると、この枠組みは習慣的見方(Habits of Mind)とももの見方(Point of View)の2つの要素から構成され、前者は文化的・社会的・政治的な行動規範に基づき証拠のない仮定や前提から影響を受けて形成され、後者は前者によってもたらされる。

Mezirowの論じる変容は、以下の10の局面を経ていくとされる(Mezirow 1991, pp.168-169筆者訳)。

- 1) A disorienting dilemma
(混乱を引き起こすジレンマ)

- 2) Self-examination with feelings of guilt or shame
(罪悪感・恥辱感を伴う自己吟味)
- 3) A critical assessment of assumptions
(想定 of 批判的側面)
- 4) Recognition that one's discontent and process of transformation are shared and that others have negotiated a similar change
(自己の不満感と変容過程が共有され、他者も同様の变化をうまく切り抜けてきたことの認識)
- 5) Exploration of options for new roles, relationships, and actions
(新しい役割・関係・行為のための選択肢の探究)
- 6) Planning of a course of action
(活動方針の計画)
- 7) Acquisition of knowledge and skills for implementing one's plans
(自己計画推進のための知識・技能の習得)
- 8) Provisionally trying out new roles
(新しい役割の暫定的試行)
- 9) Building of competence and self-confidence in new roles and relationships
(新しい役割・関係における能力・自信の構築)
- 10) A reintegration into one's life on the basis of conditions dictated by one's new perspective
(自己の新しいパースペクティブが定める条件に基づく生活への再統合)

Mezirowの理論の三つの共通テーマは意味構造を変容させるプロセスにおける経験、批判的省察、そして洞察の妥当性を確認するディスコースとされる。変容の対象となるのは学習者の経験であり、これまでの経験に付随する意味が批判的省察の対象となる。批判的省察による深い内省が開放的・包括的で変化への積極的な姿勢をもたらす。ディスコースは批判的省察が活動化される媒

体となり、経験が内省されこれまでの想定と信念が問いかけられ、すでに獲得された意味スキームと意味パースペクティブが変容する。変容のきっかけとなる一例として、短期海外研修による異文化接触を通して経験するカルチャー・ショックなども混乱を引き起こすジレンマと考えられ、いくつかの局面を経て新しいパースペクティブが提示する条件に基づく生活への再統合に至る。

Mezirowの理論を、自身の調査と理解によって発展させた一人にRobert Boydがいる。学習による認識の準拠枠の変容を中心としたMezirowに対して、心理学的に人間の意識の変容を説いたBoydの変容モデルは、Carl Jungの分析心理学にその根拠があるとされる。個人が自身に働きかけることによってこれまで経験してきた問題に対処し、その結果より洗練されたパーソナリティを発展させるという能力に注目した。Boydの変容は、「個人的ジレンマの解消と意識の拡張が、より大きなパーソナリティの統合をもたらすまでの一連の流れを含めた個人の人格における根本的な変化」(Boyd 1989, p.459)と定義づけられる。

Mezirowが理論を自己内省により関連させる一方で、Boydは「優れた識別 (discernment)」に焦点を当て、これは受容 (receptivity)・認識 (recognition)・悲痛 (grieving) の三つから成る。個人は開かれた精神を持ち物事を考えることで受容力を高め、変えるべき対象や取り巻く環境の変化を認識する。さらに、新しい方法を選択し新しいアイデアを取り入れる時に、意味を持たなくなったものへの深い痛みを覚える。自己との対話に重きを置いた彼の理論は、学習者が内面的な対話を開始することを支援する教育者の役割やナラティブ学習論を用いた変容的学習に影響を与えたと推察される。

社会文化的な学びを推奨する今日的な教育との関連性から、Paulo Freireの変容的学習はとても興味深く感じられる。それは決して終わることのないダイナミックなプロセスで、学習者がよりクリティカルな意識に目覚めると、社会と自分自身

をより変えられる能力を再発見する。個人的変容に重きを置いたMezirowとは対照的に、Freireは社会的変革を見据えた変容に関心が高かったことが注目される。今日の世界の教育が、社会を変革し未来を拓く地球市民性の育成を目指していること、また我が国の教育が、先行き不透明な社会的変化に柔軟に対応して自律的・協働的に生きる人間性の育成を求めていることからすると、Freireの変容学習理論の有する教育的意義が見えてくる。

成人教育との関連で変容的学習が説かれることも多い。子ども期には学校教育などを通じて社会規範を内面化させるが、大人期では形成された前提を批判的・省察的に変じる変容的学びが重要になってくるからである。成人教育の理論家Malcolm S. Knowlesは、成人教育の主要な概念としてアンドラゴジー (Andragogy) を発展させた。これはギリシャ語の「子ども-教育」を意味する通常の教育学Pedagogyに対して、「成人-教育」を意味するものである。Knowlesの理論は、自己概念と学習への動機づけ、経験、学習へのレディネス、学習への方向づけの四つから成る。今日の教育全体の理念からすれば、こうした成人教育の特徴は子ども教育にも当てはまると思われ、両者の垣根がなくなってきていると実感される。

Edward W. Taylor (1998) は、変容学習の実践において教師が持つべき特質として、思いやり・共感・信頼・誠実・品性を挙げている。学習者主導型の協働的な学びの形態を支持し、安心感・信頼感の漂う環境の中で、学習者は主体性・協働性・責任性をもって批判的省察や自己評価を行う機会を与えられる。教師主導型で知識注入型の学びから「主体的・対話的で深い学び」へと転換を図る日本の教育との親和性が高いことが窺われる。

上記の変容的学習理論とOECDのEducation 2030の内容を統合的に考えると、21世紀型の変容学習が見えてくるように思われる。本研究では、英国での3週間の短期研修という限定されたコンテキストではあるが、英語指導者志望生の変容的

学習を深めるために、本研修者による観察に加え、研修後の意識調査における各参加者の省察的語りを主なデータとして分析・考察する。

3. ウォーリック大学CAL短期研修

(1) 目的

ウォーリック大学CALのアカデミックなプログラムを通して、参加者の英語知識・技能、異文化理解能力、英語指導能力を統合的に磨き、大学卒業後に優れた英語指導者になるための専門的資質・能力を高めること、また他学生との交流、学校訪問、文化訪問、ホームステイ・寮滞在（今回は半数が学生寮滞在）といったキャンパス内外での多様な異文化体験を通して、時代を生きる力となる人間力を総合的に育むことを目的とする。

(2) 授業内容

本プログラムは、相互に関連し合う①英語知識・技能、②異文化理解、③英語ティーチングの三つを主軸にして構成される。今回の参加者の内訳は、英語専修1年生14名、英語専修2年生4名、社会専修2年生1名の計19名であった。前年度（1年生14名、2年生7名）とほぼ似ている。ただし今回は、新型コロナウイルス感染の拡大が懸念される中で、ホームステイ、学校訪問に影響が生じ、これと連動して週毎のプログラムも部分的に修正された。

授業に関しては、CAL専属の10数名の講師陣（より高い専門性を有するゲスト・ティーチャーを含む）によって、それぞれの専門分野に基づき、協働学習・メディア活用を配慮しながら、月曜日から金曜日までの午前・午後にかけて行われた。これには地域の学校での授業参観・授業実践の準備や文化施設訪問のガイダンスも含まれる。さらに、5グループが日・英間の文化・教育比較の視点から独自のテーマを決め、日本人・英国人への聞き取り調査を含むリサーチ・プロジェクトを行い、その成果を英語で小論文にまとめ発表し合うのも特徴である。渡航前の準備には、学校訪

問で紹介する日本昔話の英語版の完成、リサーチのテーマ設定と質問紙の作成、日本人データの収集などが含まれる。

4. 参加者に対する意識調査

ウォーリック大学CALでの研修直後に、参加者19名を対象に意識調査を行い、全員から回答が得られた。前の年度との比較がし易いように、以下の質問項目の内容はほぼ同じにしてある。

<質問項目1>

本研修の目的は、参加者が将来優れた英語指導者になるために、英語知識・スキル、異文化理解能力、英語指導力を統合的に磨き専門的資質・能力を高めるとともに、時代を生きる力となる人間力を育むことです。この観点から、今回参加してみてプログラムに関する満足度は全体的にどの程度ですか。5段階で評価し理由も書いてください。（5：大変満足 4：満足 3：普通 2：やや不満足 1：不満足 質問項目2・3・4・5も同じ）

<質問項目2>

プログラム中の授業担当者について、それぞれの専門分野に関わる授業に対する満足度は全体的にどの程度ですか。5段階で評価し理由も書いてください。

<質問項目3>

今回の小学校・中学校訪問に対する満足度は全体的にどの程度ですか。5段階で評価し理由も書いてください。

<質問項目4>

プログラム中と週末の文化訪問に対する満足度は全体的にどの程度ですか。5段階で評価し理由も書いてください。

<質問項目5>

英国滞在中の寮滞在あるいはホームステイに対

する満足度は全体的にどの程度ですか。5段階で評価し理由も書いてください。

<質問項目6>

本研修への参加を通して、自分が学びを深め成長できたと感じる点、また研修体験を今後どのように生かしていきたいと思うかについて書いてください。

5. 結果と分析

上記の質問項目1～5に関しては、下記のように5段階評価でまとめられる。質問項目毎の5段階に応じた人数配分、平均値(M)を表す数字を記入している。Mの()内の数字は、2017年度と2018年度分である。総じて不満足傾向が見られず、平均値が最低でも4.1、最高はプログラムへの総合的な満足度を問う質問項目1の4.6であった。前年度と同様にメンバーの多数派が1年生ではあるが、学びへの意識はかなり高いと感じられた。

質問項目1～5の5段階評価						
	5	4	3	2	1	M (2018, 2017)
1.	12	7	0	0	0	4.6 (4.8, 4.1)
2.	6	13	0	0	0	4.3 (4.7, 4.2)
3.	7	7	5	0	0	4.1 (4.4, 3.7)
4.	11	7	1	0	0	4.5 (4.5, 4.2)
5.	10	5	4	0	0	4.3 (4.6, 4.2)

Note. 2019 N=19 (2018 N=21, 2017 N=21) M=Mean
 5:大変満足 4:満足 3:普通
 2:やや不満足 1:不満足

質問項目1～5の理由と分析に関しては、学生のコメントの中から変容的学習に関わると判断されるものを抽出して分析する。

<質問項目1> プログラムの全体的印象

- 3週間という短い期間の中で、本研修プログラムは非常に中身が濃いものであった。授業と並行してリサーチ・プロジェクトを進めた

り学校訪問をしたりと大変であったが、全てをやり切った後には様々な面で成長した自分がいると実感した。自分のあり方を内省し価値観をより磨かれたものへと変えることができる非常に実りある研修であった。

- 内容が過密であるという点を除けば非常に有意義なプログラムだった。社会専修生として英語教育の特別な知識があまりない立場でも、言語の壁を越えて学ぼうとする意思があれば、自分の研究につながるヒントがいくらかでも得られると感じた。自分の意見を発信して思考力を高める場面が多く、3週目には何とか英語で対応できるようになった。
- 英語や英国文化、英語指導に関する知識はもちろんながら、様々な教材やクラス経営についても知見を広げることができた。授業後にJapan Societyのワークショップにも参加でき、現地の学生たちとの交流を通して自分の固定観念を崩し、新たな価値観が得られた。
- 国際色が豊かで多文化社会であるキャンパスでは、先生や学生たちの発音や考え方、生活スタイルなどがそれぞれ異なるがゆえに、毎日の授業や交流が楽しみだった。参加型の授業が多く積極的に英語で自己発信することが最も大事と思われた。日本や日本人としての自分を見つめ直すことができた。
- 大学では自分が将来やりたいと思っている形態の授業を受けることができ、訪問校ではそれに関連する授業見学もできた。これからの自分の授業法を色々考えるきっかけになった。できれば現地の学生と一緒に授業を受けてみたかったと思う。日本との違いに驚きつつも自ら順応し、これまで未体験の新しい学びを楽しむことができた。
- 単なる異文化理解研修ではなく、「教育」というテーマをきちんと踏まえたプログラムになっていて、1年生で教育に関する知識がないから理解できないと思い込む必要はなかった。英語の具体的な指導法、クラス運営など

将来的に役立つ多くの情報が提供された。
毎回自分の意見や考えを求められるのは、日本でも今後期待される授業スタイルである。

<分析>

本プログラムは、卒業後に英語指導者になることを志望する文教大学教育学部生のために、本研究者がウォーリック大学CALと共同開発したものである。講師陣はフルタイムの常連に加え、毎年何名かの新しい顔ぶれが見られる。参加学生の大半が英語教育の専門知識や教育実践に不慣れた日本の大学1年生であるために、引率者としてはその点を考慮して参加学生に寄り添うような配慮を受け入れ側に依頼した。常連の講師はこのことをよく理解しているが、今回初めて文教大生に出会った講師については、双方に戸惑いが認められ、慣れるまで引率者のサポートが必要だった。主役の講師の授業がより効果的になるように、目立ち過ぎないようにして両者とコミュニケーションを図るように配慮した。

アジアでの新型コロナウイルス流行のニュースが英国内で広まり、ホームステイをキャンセルされた半数の学生たちが、初めての寮生活に適應するにはほぼ1週間で要した。心身の不調を訴えた数名の1年生は、いずれも自宅からの通学生で、自炊・外食の経験がなく親元で日々恵まれた生活をしてきた者たちであった。個人と集団のウェルビーイングを意識せざるを得ない状況で、彼らがこれまでの生活感覚から脱皮して、多国籍の寮生と新たな関係を作り変身を遂げていく様子は、変容的学習の視点から大変興味深い。

参加学生間で認知的・非認知的スキル、異文化適應能力、対人関係能力における個人差が認められるものの、総じて研修や授業への姿勢が真摯だった。講師の期待に応えようとする努力が功を奏し、2週目からは全員揃って英語での発話量が増え、多様な授業スタイルに順応できた。また、同様の傾向が参加者間の協働による学校訪問や文化訪問、リサーチ・プロジェクトにも反映され、

日を追って自信・自己有能感が高まっていく様子が見られた。これまでの自分を批判的に省察し、ジレンマや痛みを感じながらも自己変容に果敢に取り組む彼らの姿が、講師たちに好印象を与えたようだ。人間関係の拡張がうまくいくことでプログラム全体の満足度も高まり、平均値が4.6という高い数値を示す結果に至ったと思われる。

<質問項目2> 授業担当者

- 言語・教授法・ICT・劇・文化などの幅広い分野の知識を、教育と関連づけて学ぶことを教えていただいた。クラス運営に関する授業は、教材や授業の流れを指導者の立場から考える貴重な体験であった。N先生やH先生の授業が印象的で、これまでの自分には考えられない教育観に深く共鳴した。
- どの授業にも自分にとって新しい考えや知識がたくさん詰まっており、教員を目指すための資質や技能を高めてくれた。特にM先生の授業は印象深かった。彼女のクラスは内容が難しく深い理解が求められ、自分のものとして吸収するのが容易ではなかったが、その分もっと頑張ろうという意欲が沸き起こった。
- F先生のTeaching with Technologyは、日本での授業には例が見られず、今後活用できるツールをたくさん教えていただきありがたかった。M先生の授業は専門的な背景知識が問われそうな内容であったが、Lesson Planningの実践ではグループ・メンバーで力を合わせて協働的に取り組み、成果が予想以上だった。
- どの授業にも新たな発見がありとても興味深い内容であった。全て英語で理解しなければいけないこともあって、実際の授業をイメージしにくいものもあったと思う。一方、C先生の机のない部屋でシェイクスピア演劇を扱うクラスは、机がないことで心のバリアが取り除かれ、積極的な姿勢で授業に参加できた。想像力を働かせ創作するプロセスを通し

て、英語を話すことへの抵抗感が消えていくように感じた。楽しみつつたくさん発話ができている状況が素晴らしかった。

- 帰国後に日本で授業を受けるのをためらうほどウォーリック大学での収穫が大きかった。C先生の演劇の授業から自己表現の重要性を感じ、自分でも演劇教育を取り入れることを指針の一つにしたい。自分の専門分野をただ教え込むのではなく、学び手の意見を尊重しながら、皆で専門分野の内容を深めていく学習者主体の進め方が刺激的で興味深かった。
- どの授業も難しかった分専門性に長けたものであったと思う。日本で講義型の授業に慣れているため最初は戸惑ったが、回を重ねる毎に自分の意見を持ち相手の考えを聞くことで学習の深まりを実感できた。N先生の物語を導入する実践では、子どもたちの立場になって考えることができたので、将来教師になった時にやってみたいと思う。
- 自分が今後個人的に研究してみたいと思うようなこと（もしかしたら卒論の題材になるもの）が見つかった。例えば、M先生の授業からは英国と日本での英単語の活用方法に根本的な違いがあると気づかされ、「英単語の構成要素と4技能での活用」に興味を持った。このような視点は今回のプログラムに参加しなければ手に入れることができなかった。

<分析>

授業者によって内容・方法、難易度も異なるものの、講義型一辺倒のものは皆無で、学生の思考力を活性化しオリジナルなアイデアを引き出すような工夫がなされていた。また、グループでの協働作業に際しては、メンバー個人の意見・考えを寄せ合い、役割に責任を持たないと成立しない場合が多かった。日本でもこのようなスタイルが徐々に推奨されてきているが、それが自然に行われていると感じられた。

日本の大学1・2年生は、一般に専門性の高い授業が少な目で、大学3・4年生がより専門的な授業を多く受講する傾向にある。したがって、今回の参加者はかなり背伸びしたレベルの高い授業を容赦なく受けることになった。内心不安を感じたことを吐露したコメントも見られたが、むしろ奮起してこれまでの固定観念を破り、プライドをもって自分の可能性を拡張しようとする意気込みが全参加者に認められた。これは引率者としての驚きであり、学生の潜在力の高さを誇らしく思えた。

授業例として、C先生の机のない部屋でシェイクスピア演劇を扱うクラス、N先生の物語を導入した実践は、日本での通常の英語授業のイメージや固定観念を大きく変えることになり人気があったようだ。いずれも認知・情意・身体を統合した全人教育に根差した教育法であるが、二人の先生たちが当分野で学位を取得し、実践研究を継続しながら授業改善を図っていることが理解できた。日本でも演劇などに興味を抱く英語教師はいるものの、それを専門として教育に活用することでアカデミックな研究を持続する者は少数派であろう。単なる実践ではなく、しっかりした理論に基づく授業であるがゆえに、参加者の心を動かすことができたと思われる。将来の自分の教育実践に取り入れたいとする学生の声は、日本の英語授業の改善のためにも歓迎すべきことと考える。

<質問項目3> 学校訪問

- World Book Dayの特別な行事の日に小学校を訪問し、興味深い文化を味わうことができた。児童たちや先生たちにたくさん質問しコミュニケーションを取ることで、日本との違いを発見し、違いが生じている理由も学べた。また、日々の教育活動の中にICTが活用されている様子を直に見ることができてよかった。低学年の子どもでもタブレットなどを自然に使いこなせていた。日本の教育現場よりも進んでいると感じた。

- コロナ感染の非常時に受け入れてくださった一つの小学校、対応してくださった先生方に感謝したい。1回訪れただけでも有意義であったので、何回か訪問するとか、複数の学校に行ければさらに色々な発見ができたかと思う。スペイン人の教員志望者たちと教育について協議ができたのは収穫であった。
- 中等学校の一つを訪問したが、自分としては大変満足している。これまで教えた経験がなく英国の中等学校に不安はあったが、授業を観察し、学年の異なる生徒に教え、現職教員と協議できたことは、将来に日本の学校で教える立場になった時に必ず生かされると思う。
- 英国の中等学校を訪問するのは今回が初めてであったが、現地の生徒を相手に行ったミニ授業は大変貴重な経験となった。中等学校レベルで英語を使って日本語を教えることが如何に難しいかを知ることができた。生徒の反応を踏まえて指導方法を臨機応変に変えていくことが大変だった。受け入れ側と事前に内容に関する打ち合わせができていれば、もっと充実した活動になったと思う。
- 実際に授業を観察し教えてみたことで、現地の中等学校生の積極的な姿勢に衝撃を受けた。これは大学の授業だけでは知りえなかったことだ。小学校低学年ではどのような授業が展開されているのか気にもなったので、できれば複数の学校を訪問してみたかった。それでも今回英国の現役の先生たちと話す機会が持てたのは、大変貴重な体験だった。
- 日本の大学1年生は教育実習がないので、思い出に残る大事な機会になった。反省点は山ほどあるが、生徒たちが反応してくれることで教える楽しみや達成感を強く感じ、教員になりたいという意欲が湧いた。訪問校での授業形態は学年によって多様で、見学を通して生徒を引きつける多くのアイデアを得た。今後日本で行う実習へのビジョンが見えてきた。

<分析>

教員養成に資する研修として、現地の学校訪問で教育実習らしき活動を初めて行うのは、楽しみでもあり緊張することでもある。初等教育と中等教育のいずれに関心があるかによってグループ分けがなされ、各自1回のみでの訪問となった。本来三つの小学校と二つの中等学校を訪問する予定であったが、コロナ感染を危惧した二つの小学校からキャンセルされた。それでも初めて中等学校を訪問することができたのは、中・高の英語教師を目指す学生にとっては大きな収穫であったことが窺われる。複数の学校訪問をしたかったという積極派の意見も聞こえてきたが、今回のような状況下では、1回でも訪問できたのは幸いだった。

現地での訪問日は、World Book Dayと称されるが、興味深い仮装をして授業をしている先生が目についたのは驚きだった。日本で準備しておいた「浦島太郎」の英語版は、小学校の授業実践で生かされ、ストーリー・テリングの実演として達成感を味わうことができたようだ。これとは対照的に、中等学校では日本語指導を中心にして授業を行うようにとの指示があり、直前の対応能力が問われた。「もっと事前の情報入手が早ければより満足感のある授業ができたのに」と悔やむ学生もいたが、リスクテイクとして柔軟に応じる姿勢・能力を養う好機になった。結果的に変容的学習につながる成長が感じられた。

日本の教育におけるICT活用度は、世界的に見てもかなりレベルが低いと言われている。英国では校種を超えて活用が浸透しており、学校訪問を通してそのことがよく理解できた。子ども向けの授業でも教師教育分野でも今後利用できるツールを多く学び、満足げな表情を見せた学生が多かった。

<質問項目4> 文化訪問

- 週末を利用した各自で行う文化訪問とプログラム中の文化訪問はともに有意義なものとなった。シェイクスピアの誕生地ストラト

フォードでは、授業で扱ったハムレットの一場面が上演されているのを見て、シェイクスピアにより興味を持つことができ、また英国文化をもっと知りたいと思うようになった。

- 初の海外であったが、電車・地下鉄・バスを利用してロンドン・バーミンガム・オックスフォードなど英国の主要都市を計画的に巡った。歴史ある建物からは独特な雰囲気を感じることができた。特にオックスフォードは大学の歴史が窺われ、静かな街並みの様子が心地よく、日本の風景とは異なる印象を受けた。
- 日本にいては絶対できない体験ばかりで素晴らしいと感じた。大学のキャンパス内で知り合った中国人の学生のお宅を訪れたのは特に印象深い。親日家の彼女はカレーをふるまってくれただけでなく美味しいスイーツ店にも連れて行ってくれた。英国や中国の文化を知ることができたし、初めて外国人の友人ができて一生の思い出になった。
- ロンドンでは皆で1日自由行動をしたが、観光場所が多いのでもう1日自分たちで出かけ、ハリーポッターツアーにも参加した。リサーチ・プロジェクトや授業の疲れを癒しリフレッシュできた。歴史的・社会的・文学的予備知識の有無によって楽しむ度合いも違ったかと思われる。ロンドンは世界中から人が集まり、抱える社会問題も日本とは異なると実感した。国際的な視野を広げる機会になった。

<分析>

学生たちは週末の休日を利用して、大学のあるコヴェントリーからロンドン・バーミンガム・オックスフォードなどに出かけた。例年見られたロンドン泊はいなかったが、グループ行動の原則を守り協働的に行動し目的を達成できていた。東京のイメージでロンドンの治安を捉えていた1年生が多く、トラブルに巻き込まれないように注意

を促した。その結果、危険性に配慮しながら全員無事に訪問を終えた。ハリーポッターの魅力に惹かれた1年生、オックスフォードの街並みを気に入った2年生が多かった。

全ての授業を終えた解放感もあってか、帰国日直前の土曜日に皆で訪れたウォーリック城やストラトフォードを印象深く思った学生が多かった。授業の中で演じたシェイクスピア誕生の地を訪問し、英語教育がカバーする様々な領域を自分がどのように取り入れていけばいいのか、体験的に考察できたことに文化訪問の意味があると感じた。

これまでの参加者にはない初めての事例は、キャンパスで知り合った中国人の留学生宅を訪問したケースである。英国の大学での研修であれば、現地の学生たちと直接交流できることが魅力の一つであるはずだが、今回はある程度までそれを実現できたと言える。同様に、キャンパス内のイベントを通して、フィンランド出身の大学院生と友達になった者もいた。その院生が文教グループと一緒にバーミンガム・ウォーリック城・ストラトフォードへの小旅行を楽しんだ。これも今までの研修では見られなかったことである。

<質問項目5> 寮・ホームステイ

- 最初は3週間の寮生活でうまくやっていたか不安だったが、皆で協力しながら生活することができ、振り返ってみるととても充実していたと思う。門限がないのはJapan SocietyやLanguage Caféに参加するのに都合がよかった。同世代の英国人と接する機会が増えたことで、自分の性格や弱点を考えさせられた。
- 寮の学生たちは皆親切で器具の使い方を教えたり積極的に話しかけたりしてくれた。衛生面も最低限の基準は満たしており、多少の困ったことは自分で解決できるようになった。自己成長につながった点である。一方、深夜でも騒いでいる学生に関しては、非常識なのか文化の違いなのかと疑問に思った。個

人的にはホームステイがよかったかなという気持ちが残っている。

- コロナの影響で不安はあったが、無事ホームステイができたこと、ホストマザーが様々な手配をしてくれたことに対して本当に感謝している。毎日安心してホームステイ先で過ごした。英語でネイティブと話すことへの抵抗感が減り、特有のアクセントに適応したスピーキング力を高めることができた。オーセンティックな学びの機会を今後も探求したい。
- 笑顔が素敵な一人暮らしのホストマザー宅でお世話になった。シャワーが冷水しか出ない日がある、ホストマザーの外泊の頻度が多いなど様々な問題に出会い、遠慮がちな日本人感覚では解決できないことを体験した。これによって明確に気持ちを伝えることの大切さ、価値観や習慣の違いなどを学べたと思う。
- ホームステイ先からバス停までの長い距離を一人で歩きながら、実に多くのことを気づくことができた。考え方や習慣、交通事情なども実際の体験から学べた。お昼を自分で調達するために近くのスーパーに出かけ、現地の人と世間話をする中で、異文化理解を深めこれまでの思い込みを改めることもあった。

<分析>

本研修は原則ホームステイとなっており、そのメリットはこれまでの参加者の省察からも実証されてきている。授業終了後にホームステイ先に帰り、ホストファミリーとの会話や食事を楽しみ体調を整える生活を保障できれば、引率者としても安心する。ところが、今回は新型コロナウイルス感染を危惧したファミリーのキャンセルが相次ぎ、半数がキャンパス内の学生寮に滞在せざるを得なかった。我々よりも1週間早く現地入りした日本のR大学グループが全員ホームステイをできていたことから推察すると、1週間の間で世界中

に流れた感染拡大のニュースが、この差を生み出したと思われる。まさに先行き不透明な世界の中にいることが実感された。研修初日から、男子学生全員と女子学生1名が現地の学生たちに交じって初体験の寮生活をするようになったので、引率者としては例年以上の気配りが求められた。異文化の地で個人と集団のウェルビーイングを協働的に支え合うために、多様な方略を駆使して非常事態を乗り切った。

本研究のタイトルにある変容的学習は、上記の寮滞在が引き金になったと思われる。ホームステイであれば、親元からの通学と変わらず食事が保障され自分で炊事・洗濯をする必要はないし、マナーの悪い学生が騒いで安眠を妨害することもない。実際、ホームステイができた参加学生たちは、ほぼ全員が異国での家庭生活に満足し、感謝の念を抱いてファミリーとの別れを惜しんだ。一方、寮生活については、最初の1週間に見せたそれぞれの学生の反応が、日本の大学生生活の場合とかなり異なることが興味深かった。自炊や外食に対応できない者、周囲の騒音でよく眠れない者、神経症で薬に頼りがちな者などがいることが判明したために、2年生を中心に寮生活をお互いに支え合う体制を作った。毎日の声掛けやアドバイスが実を結び、第2週目からの心的態度は驚くほどポジティブで、授業での発話量も増えグループワークにも活気が見られるようになった。環境の変化に対応するために繰り返す心の内部での批判的省察が、新しい経験に対して自己調整力を発揮するように作用したと思われる。

寮生活のメリットとしては、時間の自律的な運用が可能となり、授業外で多国籍の学生たちと交流できたことが挙げられる。日本人としてのプライドが刺激され変容的学習を導いたのかもしれない。Japan Societyとの連携で夕方からいくつかのイベントに参加して、地球市民的なセンスの向上を体感できたことは大きな意味があった。学生たちの会話から、国際語としての英語を媒介して異文化間交流を毎日楽しむ自分を意識したこ

と、これまでの閉鎖的な学びから一挙に国際的な学びの場に変化したことを歓迎する興奮が伝わってきた。ホームステイへのこだわりを持ちながらも現状を受け入れ、前向きに自己変容を遂げる学生たちの姿を観察できたことは大きな収穫だった。

<質問項目6> 学びを深め成長できた点と今後への生かし方

- 英語力以上に話す内容が重要だということに気づき、自分が普段の生活で物事について意識的に考えてこなかったことを深く反省させられた。社会にもっと目を向け自分の見解や信念を確立するように努めたい。これは教師としてのみならず社会を生きる者として重要な資質である。今までの自分の学びを軌道修正し、研修で身につけたことを今後の大学生活に最大限に生かすことが大切である。
- 本研修を通して、英語能力の向上のみならず内面的にも成長できたと思う。授業では理論的・実践的な内容を学んだことにより教授法などを勉強するモチベーションが高まった。また、自由に自己発信することへのハードルが低くなった。何かハプニングが起こる度に現地の人々の優しさに触れ、いずれ誰かのために無償の愛で行動できるようになろうと思ったのは最大の進歩だ。Literature in ELTに興味をわき、今後その分野について研究したい。
- 帰国をためらうほど充実した研修であった。自分がやりたいことが少しずつ見えてきている。授業でいただいた資料と自分のノートを照らし合わせてまとめ直し今後も活用したい。日本語を教えるワークショップでは、日本語の複雑さを痛感しながらも自国の言語を教える楽しさを感じた。今後は日本語と英語の違いを意識して英語を学習し直そうと思う。
- 今回の研修で最も向上したのは思考能力であ

る。常に積極的に考え意見を述べ互いに共感し合うことが期待された。大学で新しいものの考え方や授業法を学び、学校訪問では新しい授業スタイルに触れ、教育という分野に浸れるいい機会だった。自分が求める教育とは何かを、残りの3年間で本気で考えたい。

- 研修参加に際して、自分が英語教員になる意味、日本で英語を教える意味を見つけることが目標であった。英国での自己体験から、論理性を持って自分の意見を明確に述べることができる力を育成することも、日本の英語教育の狙いではないかと思った。これからは「世界」を知るために英語を学びたい。今回身につけた行動力を生かして理想の教員像を確立していければと思う。
- 英語を母語とする人たちの視点を学ぶことができたことで、将来英語を教える時の選択肢・対処法が増えた。また、学校訪問を通して自分の知らない規則、生徒との接し方などを学び、「よりよい学校づくり」という課題の答えを導くヒントを得ることができた。自ら学び主体的に考える自律性を生かしてこれからも成長していきたい。
- 研修を通して効果的な指導法、子どもの動機づけを高める活動などを学び、継続的に授業改善を図ろうとする意識が芽生えた。今後は自ら情報にアクセスし、指導法や活動への知見を広げ、効果的な実践例をまとめていきたい。さらに、自分自身の英語能力を高め、学際的な学びを計画的に進めていきたい。

<分析>

変容的学習に関する生の声が最も表現されているのが、この質問項目に対する回答である。全体として例年以上に想いのこもったものが多く見られ、様々な課題を自律的・協働的に解決してきた達成感と今後への新たなパースペクティブが認められる。OECDのEducation 2030において社会を変革し未来を作り上げていくコンピタンスとさ

れる「新たな価値を創造する力」、「対立やジレンマを克服する力」、「責任ある行動をとる力」に類する力が、英国での海外研修を場とする21世紀型の変容的学習のプロセスの中で、徐々に養われてきていると感じられる。

社会専修から一人参加した勇気ある2年生（小学校教員志望）の変容的成長は、特筆に値すると思われる。英語好きで小学校英語への関心も高いが、英語での口頭表現・文字表現でハンディを感じていたと吐露していた彼女は、持ち前の行動力を武器にして全身を用いた表現力で周囲の中に溶け込み、講師との関係を密にしていった。「言語と文化」に注目し、卒業研究につながるリサーチを単独で始めたのも自己決定能力の高さを示している。英語専修生たちの特性を前向きに理解し、互恵的に生き残るための努力を見せてくれた。

これまで英語力の向上を目指して勉学に励んできた頑張り屋の英語専修2年生たちが、ここにきて言語と内容の統合が如何に重要であるかに気づいたようだ。自分の学びに新しい方向性とストラテジーが必要であることを認識している。社会への開かれた心が、豊かな発想や強い信念に基づく発信力を生み出すことにも気づき、内発的に学びの軌道修正を始める契機を得たことを歓迎したい。

上記と関連して、研修中の授業内容が英語教育の多様な分野をバランスよくカバーしていたために、本来英語教育は大きな広がりを持っていることを実感した者が多かった。効果的な指導法や子ども理解といった教育学的スキルに加え、文学や演劇の有する教育効果に目覚めた者も多い。教育につながる学際的な発想の大切さに気づき、学び手としての新しいパースペクティブが生まれたようだ。文教大学の教員養成のあり方が問われることにもなる。

英語圏で日本語・日本文化を見直す機会を得たことも大きな意味がある。母語である日本語を他国の大学生や子どもたちに教える経験が、日本人大学生の変容的学習へのチャンスとなった。英国

の中等学校訪問に際して、日本語・日本文化を紹介する教材を苦勞しながらも考案し、生徒たちの反応を確認できたことは、日本で英語を教える意味、言語教育に関わる自分のあり方を考える機会になったことは間違いない。

授業で一貫して問われた力は批判的思考力で、参加者の多くが論理的な表現力とともに苦手であると感じた。英語教育に関する専門的知識や教育実習経験が乏しいことを感じながらも、指導者は本来どのような理念・信念を求められているのかを必死に考え、発表するのに慣れてきたのはプログラム後半からであった。それでも、短期間での急成長ぶりを講師たちから称賛された。

例年のプログラムで取り組むグループ・リサーチ・プロジェクトに関して、今回は初体験のポスター・プレゼンテーションとなり、これも変容的学習として新たな方向性を拓くことになった。日本でパワーポイントによるプレゼンを意識して練習してきた参加者は、ポスターを作成した経験がほぼなく、しかも英語での原稿作成を2週目の終わりまでに完成することは予想していなかった。グループ毎にテーマを設定し、日本人・英国人に対して行った聞き取り調査のデータを分析する作業は、不慣れな学生たちにとっては大きなプレッシャーだった。当然ジレンマと痛みを覚え不満の声が出てきた。しかし、プレゼン法の最終判断を学生たちに決断させたことにより、リスクテイカーとなることを協議で決めた彼らの勇気が、新たな協働の力を生み出し大きな達成感をもたらした。ポスターを前にして各グループが発表を同時進行で始めるこの形式は、発表時間の有効活用ができたこと、熱心に発表を聴く人たちの前でインターラクティブに説明できたことなどがメリットとなり、熱のこもった満足感のあるプレゼンとして参加者たちに印象づけられた。英国での最後の授業が興奮と喜びをもたらしたのは幸いであった。同時期に研修中のR大生と合同の発表であったが、日本人学生同士の相互交流も効果的に作用した。お互いにリサーチ内容を評価しフィード

バックを交換し合うことができた。個人・協働による批判的省察と努力の継続が、全体的な成長とウェルビーイングをもたらしたと言える。

6. おわりに

本研究は、2019年度の春休みに実施した第2回ウォーリック大学CAL短期研修をコンテキストとして、海外研修を通じた英語指導者志望生たちの変容的学習の様相を探ることが目的であった。引率者である本研修者の観察や研修後の意識調査の内容を主なデータとし、OECD Education 2030で期待される変容的コンピタンス、MezirowやBoyd, Freire, Knowles, Taylorらの変容的学習理論との照合を意識しながら分析を試みた。

研修後の意識調査の語りには、新しいパースペクティブへの意識を高める知的成熟性が感じられた。また、集団のウェルビーイングのために相容れない考え・論理・立場についても、相互のつながりや関連性を配慮しより統合的に考え行動しようとする変容的コンピタンスが窺われた。そこには、英語教員志望生として視野を拡張し新たな信条に基づく学びの方向性の探究、日本人としてのアイデンティティや母語を含む言語教育の意義の再認識、地球市民性や包括的なウェルビーイングへの志向、教え中心のペダゴジーから自己調整的なアンドラゴジーへの学びの転換が認められる。

上記の変容的学習を促した状況を整理すると以下ようになる。

- 1) 新型コロナウイルス感染の影響（寮滞在、キャンパス・ライフ、プログラム変更など）
- 2) 日本と大きく異なる学び・生活の体験（研修講師の教育理念と指導内容・方法、寮生活による多言語・多文化を背景とした学生交流、訪問校の教育事情と授業実践など）
- 3) 前提となる自己想定・信念との間で混乱を引き起こすジレンマと真摯な批判的省察（カルチャー・ショック、新しい授業形態や異なる価値観への対応など）

- 4) 悩める個人を支えるファシリテーターの存在（講師陣・引率教員・ホストファミリーなど）
- 5) 協働的省察により互恵的成長を遂げる学びと実践の共同体（協働学習・研究プロジェクト・学校訪問・文化訪問など）

本研究者にとってはパイロット・プログラムを含め3度目の引率であったが、将来につながる新たな学びが開けた忘れ難い研修となった。英語教育者・教師教育者として、時代の求める新しいコンピタンスを育成するプログラム開発のためのパースペクティブが開けたことに、改めて海外研修の教育的意義を感じる次第である。

引用・参考文献

- 小野由美子 (2012) 海外日本語教育実習における現職教員の変容的学習に関する事例研究『教育実践学論集』13, 155-166.
- 小嶋英夫 (2018) ウォーリック大学短期研修プログラムの教育的意義『文教大学教育学部紀要』52, 279-289.
- 富田俊明 (2019) 自我の統御と支配を超えて：教育言説における＜変容＞理解のための理論的枠組み再考『国際広報メディア・観光ジャーナル』28, 53-70.
- 正木遥香 (2016) 相互作用性に着目した変容的学習論の再評価 —「痛み」概念の変遷を手がかりに— 中国四国教育学会『教育学研究ジャーナル』19, 11-20.
- 文部科学省 (2018) OECD Education 2030について 中等教育資料, 93-100.
Retrieved from https://www.oecd.org/education/2030-project/about/documents/OECD-Education-2030-Position-Paper_Japanese.pdf#search=%27oecd+education2030%27
- Mezirow, J. (1991). *Transformative dimensions of adult learning*. San Francisco, CA: Jossey-Bass Publishers.
- Mezirow, J. (1997). *Transformative learning: Theory to practice*. *New Directions for Adult*

- and Continuing Education*. 74, summer. San Francisco, CA: Jossey-Bass Publishers.
- OECD (2018). The Future of Education and Skills: Education 2030. Retrieved from <https://www.oecd.org/education/2030/OECD%20Education%202030%20Position%20Paper.pdf>
- Taylor, E. W. (1994). Intercultural competency: A transformative learning process. *ADULT Education Quarterly*, 44 (3), 154-174.
- Taylor, E. W. (1998). *The theory and practice of transformative learning: A critical review*. Columbus, OH: Center on Education and Training for Employment.